

---

# 2014年 名門校コラボ座談会 《灘中×東大寺学園中×希学園》 「◇我が校の実力◆他校の魅力」

---



[パネリスト] 灘 中 学 校 教 頭 大森 秀治 先生  
東大寺学園中学校 教 頭 清水 優 先生  
希 学 園 学 園 長 黒田 耕平

2014年5月8日(木) 阪急グランドビル

難関国・私立中受験専門スーパーエリート塾



<http://www.nozomigakuen.co.jp/>

**学園長**：学園長の黒田でございます。本日はお忙しいところお越しいただきましてありがとうございます。両先生方にもお忙しい中お越しただいて、本当にありがとうございます。複数の学校の先生方をお招きして、それぞれの学校のいろいろな魅力などをお互いにお話をさせていただく、こういう機会というのはなかなかございません。我々としては、こういう企画をさせていただく中で、少しでもご両校の魅力を感じとっていただいたり、もっと大きなくりで言いますと、私立の代表格であるところのご両校でございますので、私立の中高一貫の教育について、また中学受験においては子育ても含めて、どのような教育というものを考えていけばいいのか、そのあたりを率直に、思う存分、先生方にもお話しいただければと思っております。よろしく願いいたします。

### 「私立」「中高一貫」「男子校」

**学園長**：それでは、本当に貴重な機会でございますので、私自身いろいろ聞かせていただきたいことがあります。その中で、皆さま方にもたぶん興味関心を持っていただけるであろうというテーマをいくつかに絞りました。灘中学校高等学校さん、それから東大寺学園中学校高等学校さんといえば、私立の中高一貫の男子校、こういう共通項がございます。その中で、公立との違いや、中高一貫だから、あるいは男子校だから、あるいは私立だからこそこういうことができるんじゃないかというような思いを持っておられると思います。そのあたりをまずお話しをいただけたらと思います。ではまず大森先生の方からお願いいたします。

**大森先生**：私立の一番いいところは、人事異動がないことですね（笑）。だから古い卒業生がやって来ても、「あっ、先生まだおるん？」というふうな話からはじまって、卒業生はすぐ昔に帰れるんです。公立だと7～8年たって行くと知っている先生はほとんどいないということになるわけです。私立というのは伝統とか校風とかが非常に維持されやすいと思うんですね。それから中高一貫のよさは、灘なんかは特に中高一貫完全持ち上がり制という形で、担任たちは中学1年から高3までずっと面倒を見ていきます。ある種、運命的な出会いをすれば、あとは文句を言おうが何をしようが、その担任たちと付き合いしかない。これは逆に教師の側から言わせると、「なんでこんな子来たん」という子がおっても、その子を6年間、できるだけええところを見つけて付き合いかなあかんわけです。何とかお互いがわかり合って理解しようというふうに努める。これを私は疑似親子関係というふうに言っています。あの先生が良かった、この先生が良かったと言っても、もうこれは詮ないことなんです。子どもが生まれたときに子どもの方が、うちのお母ちゃんではなく、あのお母ちゃんがいいなと思っても、このお父ちゃんがいいなと思ってもそれはかなわない話です。ですから、灘の場合はそれが大きな一つのメリットかと思えますね。デメリットではなくメリットです。要するにそのルールというか、規則にしたがってやるしかないんです。男子校の魅力になるんですかどうですか、私も卒

業生ですけど、「なんで女の子おれへんの」とずっと思っていました。先年、学校を全部改装してきれいにした途端に、その時の生徒代表が「これは女子を入れるための布石ではないのか」とわざわざ我々にアピールしたぐらいなんで、そうやろなあ、女の子がいたほうがええよなあというように思うところはあるんですが、一方、同性ばかりでいますとある意味気楽ですよ。要するにあまり気をつかわなくていい。女の子の目があると、特に中学生辺りだと女性の方が進んでいますからね。萎縮することもあるのかもしれない。男子だけだと男子校の良さでわりと伸び伸びと中学の3年間はいけるかなあ。ただ、色気づいていくと、さっき言ったように「女の子なんておれへんの」というふうになるんだろうと思うんですが。異性の目がないということは、まあなんと汚い（笑）、女の子がおったらもうちょっときれいになるんちゃうのというふうに思います。不潔とまでは言わないにしても、まあ汚い。身だしなみから始まって、教室の状況、部室にしてももうちょっと…（笑）。ただ、よくしたもので、そういう環境に耐えられない、こまめな男子もいます。身を犠牲にして、「お前えらいなあ」と思えるほど一生懸命掃除をしている。そういう子を見つけると、「あっ、なかなかすてたもんじゃないなあ」というふうな発見もできるのです。これ、女の子がいてしまうと、男性の中でこまめな存在というのはなかなか浮かび上がらないかもしれないですからね。



灘中学校 教頭 大森秀治先生

**学園長**：男子校のところはあまり魅力という感じではなくなってしまった部分もあるかもしれませんが（笑）。じゃあ、清水先生お願いできますか。

**清水先生**：おはようございます。大体大森先生のところと私のところはよく似た学校というのでくくられますので、先に全部言われてしまいました。重なるところもあるんですけども、私立の良さということで言うと、私自身は実は大阪の府立高校に19年間勤めておりまして、自分自身も大阪の古き良き頃の府立高校を出た者です。縁あって東大寺学園にきたんですけども、そう意味では、教員生活30年以上になりますけれども、私立と公立との違いというものを身をもってわかっているつもりです。大森先生がおっしゃいましたように、なんといっても私学にはその私学独自の創建の精神というものがあって、それがやはり脈々と受け継がれている。公立高校のことを少し申し上げれば、かつて大阪の府立高校というのは本当におおらかで、もちろん女の子もいますし、自由で、しかしまあ「決めるところは決める」という、いい雰囲気为学校が多かったように思います。

それが、今ははっきり言ってそうではない。いわゆる行政の在り方だとかそういうものにどうしても左右されがちで翻弄されている部分があります。実は私の息子も府立高校に行ってるんですけども、府立出身の私から見ると、ああこんなの違うのになあと感じます。かといって灘に通る力はなかったのもそれは仕方ないなと思っているんですけども。公立と違うところは教員が変わらない。大森先生もおっしゃいましたけれども、うちでも国語の教員にも3世代にわたって同じ先生にならって、実は僕はあの先生にならって、それが20年、30年の世代の差を超えて同じ職場で、同じ教科で仕事ができる。伝統というのはそこで働く教員が守っていき、作り上げていくものかと思います。この頃は改革と言う名のもとにいろいろ変わっていかなくてはいけないとよく言われますけれども、私自身はそういう中であって、時代にあらがうことはできないけれども変わってはならないものもあると思います。それを守り抜く。卒業生が久しぶりにふらっと訪れて、「いろいろ時代は変わったけれども、我が母校は変わってないなあ」と思える。そうやって帰っていけるところがあるというのが私学の良さだろうと思っています。中高一貫の良さというのは、これはやはり6年間というところ。12歳の少年を我々は迎え、そして18歳になるまで預かります。心も体も一番大きく変わるころです。お母さんに対して「ママ」といっていた子たちが、卒業する時には「おばはん」よばわりしますが（笑）、それでいいと。別に母親を本当におばはんと思っているわけではなくて、そういう言葉づかい一つとっても大きく成長する彼らと関われる。本校の場合も基本的には中学1年の担任団が6年間持ち上がっていくというシステムですので、「中学2年生の時こうだったよな。今はちょっと勉強をおろそかにしているけれども、こういう子が高2ぐらいになると伸びるんだよな」というふうに、6年間の長いスパンで生徒指導も教科指導もできるという良さがあります。高校入試という壁がないので、おおらかに6年間のカリキュラムを組むことができます。それはとっても大きいと思います。それと、その多感な時期を共に過ごすということで、一生の付き合いができる。全国いろんなところへ出張なり旅行なりしても、どこにでも卒業生がおります。東京行ったら常に何十人かが集まってくれまして、ずっと一生の付き合いができる。一生酒を酌み交わせる。そういう関係が中高一貫の私学でできるんだらうなと思います。それと懸案の男の子だけの良さ。これはとってもいいことだと思います。これも大森先生も少し言われましたけれども、中学生高校生時代は女の子の方が精神年齢は大体5つぐらい上だと思います。私の年になっても大体女性の方が精神年齢は上です。我が家庭もそうです。そういう中であって、やはり異性の目がないがゆえに、もっといえば女の子の視線にさらされずに自由にふるまえる。恐らく女の子がいれば、やはり自意識過剰な年頃ですので、恥ずかしさもあるだろうし、精神的に、家庭ではお母さんに牛耳られているお父さんとお母さんとの関係を少年は見ている「あっ、お母さんの方が強いんや」ということを実感して、学校へ来たらまた女の子がいる。まあ、息つく間がない。そういう意味では本当に自由にふるまえる。ただいづれ彼らは中高を卒業すると大学というところへ行って、社会へ

出て行く。そして結婚などすると、女の子あるいは女性と関わらずに生きていくということは不可能であって、大学へ行って戸惑う子が多いようですね。そのために、大森先生もそうですが、私は国語の教師なんですけども、「そのために古文をやるんやで、そのために小説を読むんやで、だからこの男と女、この駆け引き、これをしっかり勉強するんや」と言うと彼らは妙に納得する（笑）。男だけの良さというのは、この世の中にあってはもはや貴重な場であろうと思います。かつての旧制高校のぼんからな雰囲気、汚くても許される、格好も気にせずすむというところがいいんだろうなど。私服の学校でするので、もしも女の子がいたらもうこれは大変だろうなと思います。恥をかいてはいけないと思って、お金を費やさなければいけない、ださい服を着て行くと女の子に笑われるというようなことを一切考えずに過ごせる。うちの場合は夏になると短パンでもOKですので、彼らは自由にふらっとやってこられる。私自身はこのことをうらやましいなと思います。自分の中高生時代を振り返っても、女の子の目は随分気になりました。それを気にせずふるまえる良さ、というのが男子校にあるなと思っています。



東大寺学園中学校 教頭 清水優先生

**学園長：**ありがとうございました。以前に先生方とお話をさせていただいていた時に「都会の中ふるさと」という言葉が出てきました。お二人とも今日もお話いただきましたけれども、やはり先生たちがずっとおられて、先輩たちがいて、そういう都会の中にありながらも自分たちが帰っていける場と言いますか、ふるさとのような場になっていく、それが私立の良さであったり、伝統校と言われる学校の素晴らしさということじゃないでしょうか。次の話にもつながっていくかもしれませんが、お友達同士、あるいは先輩との関係、あるいは先生方との関係、そういう人脈といいますか、そういう代々受け継がれてきたその流れの一員として自分が今後の人生を歩んでいけるってところ、これは本当に何事にもかえがたい財産というものになっていくんじゃないでしょうか。私から見ているとそれが伝統校と言いますか、ご両校のような素晴らしい学校の素晴らしい魅力の大きな要素になっているんじゃないだろうかなと思っています。

**この掲載内容は抜粋版になりますので、座談会全編の内容をご覧になりたい方は、下記のお問い合わせ先までご連絡いただければ小冊子を郵送いたします。**

**【お問い合わせ先】 関西広報担当 槌谷（つちたに）**

**■希学園 十三教室 電話(06)6307-1132 s-tsuchitani@nozomigakuen.co.jp**